
罪の王冠と破滅の黙示録

プーモ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

罪の王冠と破滅の黙示録

【Nコード】

N1647Z

【作者名】

プーモ

【あらすじ】

ギルティクラウンの二次創作です。オリ主モノ。

西暦2039年、10年前に起きた『ロストクリスマス事件』で、ある体質を負ってしまった主人公が、原作をブレイクしない程度に暴れまわる！

……予定。

破壊者の生誕（前書き）

作者はギルティクラウン（以下ギルクラ）に嵌まってしまったため、完全見切り発車&不定期更新になります。受験生ですし。ストックも無いけど頑張るぜい！

破壊者の生誕

「感染レベル、ステージ4を確認。第四隔離施設に移動させるぞ……と、言っても聞こえていないか」

聞こえている。お前の声は、僕に届いている。だから 止めてくれ。

僕を閉じ込めるのは、僕を死人みたいに扱うのは、止めてくれ。

「やれやれ……あの施設なら、新たなワクチンとかも手に入るかも知れんからな……お前にとってもためになるだろ。」

「たく、ワクチン接種を拒むからこうなんだよ」

止める……！

僕は、GHQの言いなりになんかならない！

僕は、僕は

「力が、欲しい？」

力？ 何のために？

「自由を勝ち取る力」

そんな力が……手に入るのか？

「君が、望むなら」

……欲しい、力が。

僕が僕であるために、僕が自由を掴むために！

「な、何だ、この反応は……ぐうつ！？」

気がつけば、僕の身体は動いていた。

身体を囲っていた大仰な機材を吹き飛ばす。

何かに火花が引火したのか、辺り一面が紅蓮の炎に包まれた。

今にも僕に飛び火しそうなそれは、一閃の下に払われた。

僕の身体の半分を覆っていた結晶は、剣の如き形を保ち、僕の意のままに操れる。

「貴様、何故！？」

僕の担当の男が、酷く取り乱している。今の今まで死人同然だっ

た僕に、今は恐怖の目を向けている……滑稽だな。

僕はその男をただ一瞥し、その場を去った。

24区第6病棟　そこで、僕は力を手に入れた。
自由を勝ち取る、破壊者の力を。

「^{じん}仁、起きて」

「ん……いのり？」

重い目蓋を開くと、そこでは端正な顔立ちの少女がこちらを覗き込んでいた。ちなみに、服装は赤くてヒラヒラした服。仲間内では『金魚服』と呼ばれている、何か可哀想な服だ。

それを着こなすこの娘は楪　いのり。恐らくこの娘以外にこの服は似合わないだろう、桃色の髪をした可憐な少女だ。

彼女は僕の仲間なんだが……はて、何故僕の部屋に？

「今日は作戦会議がある、って涯が言ってた」

しまった……そういえばそんなことを言ってたな、涯。

涯とは、僕の所属する組織のリーダー、恙神^{つがみ}涯^{がい}のことだ。特徴を挙げるなら、金髪のロン毛でカリスマ性に満ち溢れたイケメン……

…と、これは表向きの涯。

裏ではまあ、可愛いヤツだ。これが。

「悪いな、いのり。僕もすぐ支度するから、先に」

「だめ。着替えも後」

……ああ、また遅刻したのか、僕。

目覚まし時計をちらりと見遣ると　集合時間を、実に30分過ぎていた。

こりや、綾瀬に投げられそうだ……いや、アルゴに殴られるかもなあ。

仕方無く、僕は外に出ようとドアのノブに手を掛けた、が。その手首に、手錠が掛けられた。

「……あのー、いのりさん？」

「何？」

あくまでお惚けになれるか。

「この、手錠（？）は何？」

「仁はすぐサボるから、見張り用に」

そういえば、前回会議忘れてどっか行ったら凄い怒られたなあ。

あ、前々回もだっけ。

その所為でいのりが僕の世話係にさせられたんだから、可哀想な話だ。

「早く行こう」

痛たたた。手首の肉が手錠に挟まってるっ！

そんなことはお構い無しに、いのりはガンガン寂れた廊下を進むと、廊下の先から強面な男が曲がってきた。

こいつも僕らの仲間、アルゴだ。白兵戦技術に長ける、云わば切り込み隊長ってヤツ。

「お、仁。どうやら、本格的にいのりが世話係になったらしいな」

「うるさい、アルゴ（ねくら）。お前も今日は遅刻か？」

「ばかお前、今日の開始時刻遅延するって言ってただろ？ てか、ネクラじゃねえよ」

あ、そういえば、涯がそんなこと言ってたっけ。

て、あれ？ なら、なんでいのりは僕を……？

訝しげな視線を彼女に向けると、プイとそっぽを向いてしまった。僅かに頬が赤くなってるのは、時間間違えたからか……いのりにしては珍しい。

「とにかく、後30分は時間あるんだよ。飯でも食ってきたらどうだ？」

「んじゃ、そーすっかな。さんきゅ、ネクラ」

「だからネクラじゃねえって言ってんだろ！」

ネクラを華麗に無視^{スルー}して、僕はくるっとUターン。まずは僕の部屋で着替えてこようとして

「食堂はこっち」

いのりに、逆方向に引つ張られた。手首が折れそうなんすけど、マジで。

そついや手錠^{これ}してたな……忘れてた。

「あの一、いのりさん？」

「何？」

「いやその一、食事の時くらい手錠、外して貰えませんか？」

「ダメ」

「……俺にサンドイッチにしろと、そういうことが、いのり」

「嫌なの？」

「いや別に」

「そう。なら良い」

……未だかつて、ここまで冷たくあしらわれたことがあっただろうか。答えは否、あるいはノー。

いのりはあまり感情を表に出さない娘だからなく、ま、仕方無いか。

「朝からどうしたのですか、仁、いのり」

僕が片手のみでサンドイッチを食していると、前の席に銀髪の男が座った。

四分儀。眼鏡を掛けてる知的な男で、いつも丁寧口調。組織の中でも比較的年長に位置する人物だ。こいつも僕らの仲間……というか、ここにいるヤツは大抵仲間だな。

辺りを見回すと、皆は赤いラインの入った黒いジャケットを着ていた。これが僕の所属する組織の基本的な装備、まあ制服みたいなモノだ。

「どうした、って、飯だけど？」

「仁、貴方は女性に繋がれながら食事を取るのが趣味でしたか？」
め、面倒くせっ！

僕は四分儀の相手があまり得意ではない。だって頭良さそうなん

だもの。

「いのりは僕の世話係だからね」

「誇れることではありませんよ、仁……」

確かに。僕が自分で身の回りのことを出来てないことが露呈しているようなものだ。

彼女はあまり気にしていないようだが……これでは、僕が何も出来ないヤツみたいだ。

「いのり、これ外して？」

「ダメ」

即決かい。

……まあ、涯の命令なら仕方無いが。いのりは基本、涯の命令には逆らわないし。

そんなこんなで朝食 トーストと目玉焼きというテンプレなメ

ニューだ を戴いた僕は、いのりが食べ終えるのを待ち、それが

ブリーファイング・ルーム
ら作戦会議室へ向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1647z/>

罪の王冠と破滅の黙示録

2011年12月5日22時52分発行